

パネルディスカッション

「地域文化を活かしたわがまち環境づくり」

コーディネーター

吉 田 幹 男（県民参加の鳥取学構築事業検討委員会副代表）

鳥取市在住。地域デザイン研究所所長、県民参加の鳥取学検討委員会を始め各種委員会にてまちづくりに関わる。

パネリスト

吉 本 哲 郎（地元学協会事務局長）

基調講演：プロフィールを参照

石 谷 寸美子（アートマネジメント学会山陰支部）

智頭町在住。智頭石谷邸を所有しその公開までに関わる。現在は石谷邸を有効活用しながらまちづくりに携わる。

長 田 吉太郎（米子を愛するふるさと塾代表世話人）

米子市在住。長田茶店代表取締役社長。社長業の傍ら米子市の市街地活性化などのまちづくりや特産品を全国にアピールする活動等を行う。

○実践をふまえた地域文化



（吉田） まずは我々の湖山池の取組からお話しを進めたいと思います。これは鳥取大学の学生さんたちを中心に働きかけてもらいました。池について調べたりしたのですが、子どもたちが1年もすると非常に変わってきて、この池でいろいろ楽しんだり、舟にも乗っていろんなことを調べたりというようなことになりました。しかも、それをさらにいろんな絵地図に現したり、発表したりしました。これは、必ずしも我々の委員が直接子どもたちに関わったということではなく、鳥取

大学の学生さんたちに中心になってもらってやったということが、比較的子どもたちと上手い関係で進めていけたと思っています。子どもたちのお父さんやお母さんも、非常に最後には一生懸命になっていただいて、発表会の時にはたくさんのご父兄の方にも参加していただいて、ある意味では、湖山池を知るというところまでは成功したと思っています。ただ湖山池のなかで、今後については、まだまだこれからの段階というところでもあります。先ほどの吉本さんのお話ではないですけど、その中から何を生み出していくのかということですね。そこまでは、なかなか未だ至っていないということだろうと思っています。いろんなものづくりとか、そういうところまでには未だ至っていないというような現状です。

本日、県内からおこしのお二人は、地域のなかで、リーダーとして、いろんなかたちで関わり、あるもの探しもやってきていらっしゃる方だというように思っています。

まずは、今日のパネラーのお二人に、それぞれ今の活動の拠り所とといいますか、それぞれの地域で、自己紹介も兼ねながら、どんなことをやっているのかということ、今日のテーマに即してちょっとお話をいただこうと思います。それじゃあ最初に長田さん、お願いします。



(長田) 米子からやってまいりました長田と申します。私は、『米子を愛するふるさと塾』というのを、もう既に20年間ぐらいやっておりますけれども、その間、永六輔さんを僅か2、3万で呼んだり、活動写真をやってみたり、いろんなことをやりました。そういうなかで最近、やっぱり鳥取県にはもっといいものがたくさんあるだろうということで、『ええもん探し』というのをやりまして、皆さん方のお手元の中にあります資料を見ていただきたいんですが、『米子ええもん噺』というこういう冊子を出しました。

鳥取県には物産協会というのがあります。これは県がかなり予算を出して店を出しております。そして、東京は三越、大阪は阪急。そういうところで物産展をやっておりますけれども、こういうことを言ったらなんですけれども売れません。鳥取県の店は売れません。何故かという、売るものがないということと、それから売り方も下手だということですね。おそらく、これだけ売り上げが低いと止めさせられると。鳥取県はどこに出ても売れない。私の店が渋谷南口の東京の東急プラザの地下にありますけれども、3坪の鳥取の店を当時の西尾知事に頼んでオープンしていただきました。残念ながら3年で倒産をいたしました。倒産というのは、金銭面というよりも売るものがないし、売り方も下手だし。私もせっかく東急不動産に頼みにいたりして、そしてオープンの時には西尾知事の鏡割りまでやったその鳥取県の店がですね、ともかく店を閉めたということです。残念ながら鳥取県にいと分かりませんけれども、私、東京の店をやっております、あらゆる情報、或いは東京の店から全国を見て歩いておりますので、もうひとつがんばらないと鳥取県はいかんということを前提に、20年前『米子ええもん噺』という、こういう冊子をつくったわけです。鳥取物産協会というのは東部の人が多く、そのため西がなかなか燃えないものですから、私たちが全部ボランティアで物産振興会というものをつくって、そして米子のええもん、『ええもん噺』という冊子を。これ18号ですから、つくって18年になります。これは一銭のお金ももらっておりません。市長の顔を載せたら補助金でももらえるかなと思ったのですが、もらえませんでした。

今日は、特産品で地域おこしという話をさせていただきます。ここに『大山みどり』というペットボトルを出しました。これは大山産の有機農法の茶畑100%使用という、これを出しました。出しましたが、残念ながら何百万ケース、『伊衛門』ではないんですけれども、そんなに売れません。それで私どものところは10万本を目標としまして、今は6万本を消化して。今年は暑かったのでよかったです。よく売れて、途中で品切れをさせたわけなんですけれども。これは大山のお茶『陣構』という名和町にありますけれども、これは100%無農薬のいわゆる有機農法の、国の指定の畑、そして鳥取県の指定の畑です。『伊衛門』はいろんな宣伝をして

おります。けれど我々はなかなかそういうお金を掛けてできません。ということで、一生懸命口コミで持って広げております。先ず『ええもん噺』の話をします。1枚はぐって1ページ・2ページをご覧ください。『よりどり市場』といって、欲しいものだけを3点ぐらい選ぶ仕掛けになっております。「無いならつくればいい。無いというのは可能性があるということだ」、ということで『イカの腹芸』という商品があります。我々はなんでもつくるわけですし、これは『大山ハム』のソーセージをイカの中に入れたものです。これのテーマソング『これはイカの腹芸三度笠』という歌もつくりました。全てそういうテーマソングをつくっています。次に『米子のだら漬け』。これはかなりヒットしまして、10年目に『米子のだら漬け節』というものをつくりました。

『氷温』というのをご存知だろうと思いますけれど、それでやりますと非常に『津田かぶ』はおいしいですね。普通の売り場で売っても面白くないですから、エスカレーターの下、ちょっと暗めのところで、「幻のかぶが来ました」。そうすると人がドッと寄って来られるわけですね。別に幻ではないですが渋谷では幻になっているんです。ちょっと暗がりのところでやると、なんだ、なんだということで、いっぱいになります。そういうふう to 売り方があるわけですね。

一番裏側には米子を愛するガイド。歴史、文化をこうして紹介をしているわけですね。これを今5万部ほど出しておりまして、非常に喜ばれています。お陰様で、利益があるときにはいいけれど、損したときには私が会長で金を出さなければいけないと、儲かったらみんな飲んでしまうと。こういうような会でして、そのくらい気軽な会でないと続きません。あちらはあちら、こちらはこちらで宣伝したいというふう to 思っております。こういうものづくりをいたしております。

(吉田) 地域の商店街をなんとかしようという運動もされていますね。

(長田) 下町といって、いわゆる江戸時代に流行った。お陰様で大分街並み整備事業という国の事業になりまして、おそらく石畳になったり何億というお金が今度下りるようになります。これは私の住んでいるところですので、皆さん方とやっております。ずっとこれも平成2年からやりまして、皆さんがもう70何歳です。70何歳の人が酒を飲んで20年ぐらいやっておりますから、いい傾向だと思います。

(吉田) ありがとうございます。では石谷さん、お願いします。



(石谷) こんにちは、石谷と申します。多分ここに『アートマネジメント学会山陰支部会員』と書かれていると思いますが、今やっていますことは、智頭町の行政サイドと一緒にってコミュニティーアート、地域のアート。広い意味での、例えば景観とか人の仕草なんかも含めて町のいろんな、人の癒しになるようなこととかも含めての文化芸術的なものについて学習してみようという。学習し、いろんな計画をたてながら、それを進めていく提案をしていくそれを学習していこうというような会を立ち上げて、まだ1年たったばかりですけれども、そういう会をやっているものです。

私がアートに関わったのは娘がバレエをしていたときでした。鳥取市民会館で、『流し雛幻想』

という用瀬の流し雛についてのお話をロミオとジュリエットみたいなものにつくり変えてやったことが始めてでしたね。今、智頭でやっていますことは、智頭町に藍染めを広めたいという想いで藍染めを種から。四国の方から種をいただきまして、種をなるべくたくさん広めつつ、藍染めを教えてください先生を探して女性の方に教えていただきながら、『智頭ブルー』という名前で特産化しようということで動いております。それが、今私がやっていることです。

(吉田) 石谷さんは、智頭の観光名所である『石谷家住宅』の所有者で、今もあの中にお住まいになっていますね。

智頭町は20年前ぐらいから、山間地の方ではゼロ分の1運動とかの村づくりで、一部の人たちによって、かなり地域づくりの活動も展開していましたが、一番中心部の智頭地区ですね。ここが非常に沈滞している。智頭地区の人たちは、ゼロ分の1運動なんかも非常に冷ややかな目で見ていたというような事情があったんですね。先ほどの吉本先生のお話しますと、愚痴ばかり。「智頭には何もないんだ。智頭では何もできないんだ」、というような雰囲気だったと思います。それをなんとか打開しようということで、町の方でも石谷さんに働きかけられ住宅を町に寄付していただいた。一般公開されたときに、非常にたくさんの方が訪れたわけです。それが、智頭の中心部に住んでいる人たちの意識を変えたと思います。それ以後、まちづくりの団体もしっかりできていますし、石谷家住宅というものを核にして、いろんな仕掛けができあがりつつあると。これも吉本さんの言葉を借りれば、あるものをいろんな形で組み合わせしていくということだろうと思いました。そうした活動が智頭町というものを大きく変えてきているのではないかなと思います。その当事者の一人として、もう少しお話いただけませんかでしょうか。

(石谷) 智頭町が私どもに、以前から、公開してほしいというような話はあったのですが、住んでいましたのでなかなか難しい話でした。しかし、なんとか開放してほしいということで、結局、寄付という話になって、『因幡ふるさと振興財団』というかたちで、ふるさと振興ということを中心にした財団づくりをしてもらえるのでしたら寄付をさせてもらいたいという形をお願いいたしました。

考えますに智頭町はずいぶん早く、1980年代の終わりから、寺谷篤さんという那岐の郵便局長さんとか前橋さんという方々や鳥大の先生と連携しながら産学協働みたいなかたちで、町おこしを社会科学的な見地で、実験場みたいなかたちで進めていたというのが、すごく大きな流れとなっていたと思います。そういう流れのなかで、私どもの家が最終的に使われたというだけのことだと思います。

智頭町は、山間部の方はすごく自立心が強いというか。元々6つの村が昭和21年の合併の時に集まって1つの町になったとはいうものの、財産区というものをしっかり持っていて、小学校がそれぞれにあって、皆さん教育という面でもそれぞれが自立しています。その流れのなかで、最終的に智頭の一番川下のまちが、町おこしに加わって、少し賑やかになってきたというふうに私は理解しております。

(吉田) ありがとうございます。『イカの腹芸』というように、何かあるものを組み合わせて1つの商品化するというようなお話もありましたが、あるものを活かすというのは、石谷さんの智頭でもそうだと思います。お二人のお話を聴かれて吉本さん、いかがでしょうか。

(吉本) やっぱりやったお二人の話を聴いて、へえーって思うものがいっぱいありますね。私



はいつも話を聴いて思うんですけれども、何故なのかっていうことで入り込んでいきます。やっぱり訪ねてみたいなあと思いましたね。米子にも行ったことがあるんですが、人を訪ねていませんので。なぜこういう方が生まれたのかとか、なんでそういう発想ができるようになったのかということまで聴きたいと思いましたね。先ほど、ないものねだりとか愚痴っていうものはやってもなんにもならないというふうに言いましたけ

れども、水俣というところは、ほんとに40年間ないものねだり、愚痴だけでなく、悪口、中傷、嫌がらせの電話が凄まじかったところですね。嫌な町でしたから。それと農産物も売れないところから這い上がってきましたから、人一倍の努力ではダメだった町です。人二倍やらないと人一倍だったらゼロになるだけです、マイナスが埋め戻されるだけでしたから。先ほども聴いてて、鳥取は何もないとかイメージが弱いというけれども、まだ救われますね、水俣はマイナスでしたから。ゼロでもなかったですね、ゼロ以下でしたから。

智頭町のゼロ1運動なんか、私にとっては有名なところですよ。憧れの地なんですね。智頭町の人のお話を聴けるなんて思ってもいなくて、話し込んでいたらいろんな知り合いがいて、エッとか思いましたので、非常に今日は楽しくなりました。

(吉田) 長田さん、米子では今の商店街の活動以外にも、たくさんいろんな文化活動などの運動をいろんな団体が起こしている。それについて一言いただけませんか。

(長田) そうですね。『米子を愛するふるさと塾』というのが。米子は何もないと。ないけれども何かいいことがあるだろう。米子のなかを知ることによって誇りがもてるというところから、じつは米子の好きなものは集まれと言ったら80人ほど集まって来られて、それで始めたんですね。じつは、米子を観るのにバスで行こうということになって、日交バスの所長の本田さんという人に頼みまして、「すいません。こういう趣旨ですので、米子のために一肌脱いだけいただけませんか。バスをただで貸してもらえませんかでしょうか。」と言ったわけです。「まけてくれとは聞いたことがあるけれども、ただとは初めてだ。」と言って、あまりの驚きに、合計7台ぐらい無料で貸してもらったわけです。きれいなバスガイドを乗せて、それで米子中を廻ったわけです。扎扎实り我々は一人500円ずつ集めて、それを資金にしたわけです。

それで、どっかに祭りがあると聞けば、必ずそこの祭りに行行って応援をすると。『しょうじき村』という下町のまち起こしをやるわけですけど、これも『しょうじき村』のまつりから起こりました。とにかく、ないということは可能性があるとことだということ、十数年続きました。実に一番多く集まったのは25,000人ぐらい。90戸の家に25,000人ぐらい、溢れるぐらいの人。全然宣伝しないのに来られる。だから金ばかり使って宣伝して、いわゆる建物を建てたりすることはないと思いますね。我々が12時、1時まで若者が入って、そして祭りの稽古をしている、祭りの準備をしている。そういうところをたくさん見るわけですね。そういうところに人が集まってくる。町の活性化というのは活性の性というのは人の心を活かすというふうに書いてありますね。決してものを活かすとは書いてないわけです。それを、活性化ということですからすぐものを建てるようなことをする行政の皆さんもおられますけれども、行政に方はそういう人もおられますけれども、これは間違いですね。やはり人は、一生懸命いろんなことで地域に尽くしているところに人は寄って来る。あくまでも心と心のつながり

こそ、地域の活性化になるんじゃないかと思っています。

(吉田) 人が人を呼ぶ、という非常にいいお話でした。石谷さん。何年か前、智頭で枕田遺跡という縄文遺跡が発見されて、山間地には縄文遺跡はないと言われていたのが智頭で発見された。しかもそれも西日本最大の集落遺跡ではないかと言われた。そういったなかで最近、また稲作文化を思わせるようなものも発見されたというようなことで、いろいろと智頭というものを、位置的にもいろんな形で見直そうという動きがでているわけですけど、そんな中そういった歴史から学ぶということで、智頭町をですね、そんなことでどういうことを考えられますか。

(石谷) 先ほど吉本先生が個性を確認すれば奇跡が起こるっていうふうに言われました。枕田遺跡っていうのが一昨年発掘され、結局は福祉施設の開発のための調査のための発掘だったためにやはり結局は潰されてしまったんですけども。それは当時の生活がはっきりわかるような遺跡が発掘されたわけです。わずかな



盆地の中の広場みたいな平野ですけども、そういう場所ですから人はそこにしか住めなかったし、そこが非常に住みやすい場所であったんだらう、行政府も、奈良時代、平安時代と行政の場所でもあった。そのような智頭町の個性がだんだんはっきりしてきているんで、まちづくりにだんだん魂が入ってくるんじゃないかなと思っています。

(吉田) 智頭町っていうのは気候風土も鳥取県の中ですけど、割りところ瀬戸内のほうの気候にも近いところがあってちょっとまた違った風土、それから生まれたその風土というものもまた違ってると思うんですね。そういった縄文時代から瀬戸内とこの日本海地域を非常に繋ぐ役割を果たしていたというようなこともだんだんと分かってきているということは、その後、もちろん江戸時代なんかもそういった広域の中心でもあったわけですけど、そういうことがこれからの智頭町ですね、新しい街づくりの何かを表しているといいますかね、その中から何かある1つの物づくりなんかに繋いでいけるヒントがあるんじゃないかなということを考えるわけです。

〇まとめ

(吉田) 時間もだんだん残り少なくなってきました。吉本さんのさっきのお話で、人の元気、地域の元気、経済の元気というのをおっしゃったんですけど、人の元気が一番だろうと思うんですけどね、それから地域の元気が出て、それから経済に繋がるのか。人と経済が初めて、最後に地域が元気のなるのかというところもあると思うんです。

私はもちろん経済も伴わなければいかんという面があるんですけども、まずは精神面の充足かなということをそのとき思ったわけですけどね。この地域への取り組みというのもまずそういった、まずはこのほんとに地域をですね、そこから勿論経済的な充足が得られればいいんですけど、まずはその地域に愛着を持つというのがひとつの精神的な充足にも繋がるわけですけど、まあそんなところからまずは手掛けていくのかなと。そのための何ていいますかね、組織というか拠点作りというものもあると思うんです。そんなことについて3人の方にですね、まずそれぞれの方の活動を踏まえてですね、これからどのようにそういった問題に対処していくのかと、いきたいのかということをお話していただきたいと思います。長田さんお願いしま

す。

(長田) 東京の渋谷に三坪の小さい私のところの店があります。誰も東京に知ったものがなくて突如として生まれた店で20年間続いております。ここでとにかく東京に人間に負けちゃあいかんということでこの20年間実は米子弁で応対しております。私のところの従業員は東京の人ですけども、全員米子弁を習わんと辞めてもらいますとこういうとこまでやっています。とにかく人なんです。渋谷のど真ん中で米子弁を使って、鳥取県だよと言って胸を張るといようなことです。吉本さんがお話ししました天野さん。私は訪ねていきました。ものすごい山奥です。天野という人が東京のラジスタボーイというところで紅茶を売っている、うちも売ってるんですよ。あの人に会いたいと思ってわざわざ行った。あの囲炉裏に座りまして、そういうね、誰かどこかに人がいるんですよ。

倉本聰さんがね、富良野の一家のいわゆる観光パンフレットに十何年前に書いたのをちょっと見たんですけども、富良野、北海道に来て自然をいわゆる見たいと思う、一汗もかかずにね、一汗もかかずにそういうことを、自然を見たいと思う人があれば、それは東京のど真中で絵葉書でも見とればいいと。ここの富良野というのは観光地ではないと。とにかくひっそりと、生活している一生懸命生活している生活の場であると。しかしもしあなたがそこまで来ちゃったんなら、ようこそ北の国へと。

これなんですね。我々はそこに光のものがあ。そういうところに今来ておる、人ですね、今の話は。私は非常にいわゆる鳥取県の名物は何ですかとよく聞かれましたね。はい、鳥取県の名物は片山知事でございますというですけど。あれはただ食べられませんね。ただ片山知事さんをもって我々は、あっ鳥取県は片山さんですねと。これは非常にいいですね。東京に、都会に行きますとね。そういう人なんです。観光とはですね、自然、気候、風土、社会、生活、文化、そしてその地に住まう人々、およそ地域における固有の自然に触れて地域を理解しようとする心そのものを意味する。だから光というのは、やっぱり人なんですね。その人をどう、鳥取県は非常に素晴らしい人がたくさんおられます。もっとやっぱり、胸を張ってですね、ものが無いということではなくて、片山知事に習ってですね、何とか人を自分を日本中に世界中にアピールするということになれば、私は地域おこしは必ずできると思います。

(吉田) はい、ありがとうございます。石谷さんお願いします。

(石谷) 私どもの住んでいた家が公共の館として今後ずつと残るわけですから、それが少しでも活性化するようにという願いがあって、いまおっしゃった光を見せる役割を少しでも果たせる様に学習の機会を増やしていきたいです。アートマネジメント、特に山間の集落の中でコミュニティ、全体が光を見せることができるようなそういう学習をする会を少しでも盛んにしていきたいです。自治省とか文化庁が1980年代の終わりからいろんな事業を、故郷振興事業とか地域振興事業とか次々に行ってきて、その地域住民の内発性とか主体性というものを寛容したいという動きの中で、なかなか動けないでいる私たち。だけど、動かなければいけない、やはり自分たちのニーズを行政の方たちにつけて、こういうことを一緒にして下さいと言いながら、鳥取県全体に光が当たるような動きをするようなことになればと実践をしていきたいと願っております。

(吉田) 最後に吉本さん。鳥取学の実践にとってですね、これからの何が一番必要なのか、一言でお願いしたいと思いますけど。

(吉本) 簡単に7つ。1番目、土地の神の声を聞け。土地に書いてあります。私たちが読み取

る力が無い。土地の神の声を聞いてください。私が言い聞かせている言葉です。2番目、若者を鍛えるために私は3つしか言いませんでした。1つ、正しいことには気をつけろ。2つ目、遊びを決めてから仕事をせい。3つ目、下心で付き合え。お茶の丘の松本、天野は見事に日本でもトップクラスの少年になっていきました。松本は、アメリカに行きました。何しに行ったんだって聞いたら、友達の引っ越しの手伝いっていうんです。それでアメリカまで行く男になりました。3番目、自分の食べているもの、自分が身に付けている物を少しに多めに作っておすそわけというのが物づくりの原点であろうと思います。4番目、生活観光です。だと思えます。生活を観光するというキーワードが鳥取にあるかもしれません。5つ目、これはあるものを探すということですが、あるものを探していけば誇りをもって、そして若者も誇りをもって住むようになるし、出て行き方も違います。帰り方も違います。愚痴で送り出さないことです。6番目、女の人を先に立ててやっていただければ、水俣がやったように。ただし元気村女性会議は、男は入ったらいかんのかというのがありますが、入ってもいいんだけど、その代わり黙っておけと言っています。ただ、男の出番は3つです。力仕事で出てくれ。2つ目、困ったときに出てくれ。3つ目、冗談を言え。なぜかっていうと女の方は好き嫌いが激しいもので仲間割れするんですよ。だから冗談でほぐしていかないとですね、先に行ったらうまくいきます。で、7番目、一緒にやるっていうことです。行政がどうの、民間主導がどうの、どちらも一緒に動けばいいじゃないですか、どこが先にとかなわないで皆一緒にやればいい、水俣では行政参加という言葉を使ってやってきました。それがこういうふうになりました。以上です。(吉田) はい、ありがとうございました。鳥取学もですね、我々の検討委員会というのは今年度で終了しますが、いわゆる実践としては来年度が発点となるというように思っておりまして、それがどういう形でこれから推進ですね、母体というものがどういう形になるのかというのがこれからの課題なんですけれど、いずれにしろ県民皆が参加することになってます。県民皆が鳥取県を、それぞれの地元を見る気になってみるというところからスタートしないといけないんじゃないかと思っておりますけど、そのためにどんな組織がですね、どんなやり方が必要なのかということを我々としても半年間検討して行きたいなということを思っています。皆さんもそういった活動にリーダーとして参加していただけたらと思います。本当に本日はありがとうございました。